

生命保険業の効率性と公平性—有効競争の観点から—

福岡大学 根本 篤 司

生命保険業における効率性は、規模の経済性など費用に関して認められるところであるが、一方で、生命保険会社による規模の経済性の追求は、寡占市場の弊害をもたらす要因と考えられる。たとえば、カルテル料率の下での規模の経済性の追求は、生命保険業に超過利潤の発生をもたらすのである。

このようなカルテル料率は、過度な料率競争による生命保険会社の破綻を回避することによって間接的な契約者保護を実現する一方で、料率の引下げという直接的な消費者利益を損ねると考えられる。さらに、規模の経済性を確保するための生命保険会社の合併行動が生じれば、市場支配力を通じて企業間の協調的行動をもたらし、競争を阻害することも考えられる。

そのため、わが国の生命保険業では、料率競争（価格競争）は限定的に展開され、保有契約高の拡大を目的とした販売や広告といった非価格競争が重視されてきたのである。

このような市場において有効競争を実現するためには、たとえば、契約者配当を価格の調整機能にとどまらないような配当水準まで引上げることによって、料率競争を間接的に実現させて、市場の効率性を高めることが考えられてきた。

生命保険業の有効競争の議論は、種々の競争の活発化を目的とする規制緩和や、契約者保護を重視したセーフティ・ネットを構築するための規制の強化について、それらの理論的根拠の一部を提供しているのである。

ところで、低調な金融環境を端緒とする、近年の逆ザヤに関する問題は、生命保険会社の財務の健全性に深刻な影響を与えている。

現在、多くの生命保険会社は、財務の健全性の維持・向上を図るために逆ザヤの解消に努めており、それは収益構造上の死差益と費差益でもって利差損を埋め合わせることによって達成される。

市場競争の促進を目的とし、いわゆる各生命保険会社の企業努力に基づく経営の効率化を求める規制の下では、生命保険会社の破綻は、経済的保障の達成という加入者の便益を、直接的に損ねるものであり、生命保険業にかかる信頼という観点から問題である。

このような逆ザヤと関連した種々の問題は、生命保険業の現代的課題として捉えられる

【平成 21 年度日本保険学会大会】

第Ⅱセッション

報告要旨：根本篤司

ものであり、市場成果として評価・検討する必要がある。

たとえば、生命保険会社の剰余金の処理についてである。契約者配当の引上げは、市場において積極的な配当競争を促し、また実質的な製品差別化を実現する上で有益であると考えられるが、過度な競争は生命保険会社の内部留保を小さくし、財務の健全性に影響を及ぼすかもしれない。生命保険会社は、契約者配当の配当水準の引上げと内部留保の充実のあいだでジレンマに陥るのである。

そこで生命保険会社は、内部留保の確保を目的として、自社の契約者配当の水準を経営体力の弱い保険会社の水準に設定することによって、配当競争を回避することも考えられる。しかし、このような契約者配当の調整は、寡占市場における企業間の協調的行動であり、市場機構による効率的な資源分配を妨げる要因である。

また、近年の社会的関心事として、生命保険会社の保険金不払い・支払い漏れが生じており、これも契約者利益の観点から市場成果として検討すべき問題である。

一連の保険金不払い問題は、加入者の告知義務違反や、生命保険会社の独自の規準によって、保険金を支払わないケースが全社的に多発している点が特徴である。

そこで、保険金不払いについて以下の 2 点を論点としてあげる。

第一に、費用として支払う保険金を抑制して、死差益を多く確保し、財務の健全性の向上を図るといふ生命保険会社の目的と、保険金不払いという生命保険会社の実際の行動との関連についてである。

第二に、保険契約をめぐる保険者と加入者の関係についてである。両者の保有する情報の量・質の格差をめぐる問題は、情報の経済学と保険理論から検討されるが、保険者側に情報が偏在したままで、生命保険会社の主導による保険金不払いが行われるならば、保険取引という市場機構を通じた効率的な資源分配は公平性を欠くと考えられる。

有効競争の理論では、望ましい市場成果の基準のひとつとして、公平性の概念を問われるのである。

かくして、本大会では、上述の生命保険業の現代的課題を踏まえて、生命保険業の効率性と公正性について、有効競争の観点から考察した研究成果を報告する予定である。

なお、一般に、有効競争の理論では、市場を構造・行動・成果の 3 つの概念から分析・検討する産業組織論の理論的枠組みが用いられており、本研究においても同様に援用する。